

幼稚園の朝

倉 橋 惣 三

幼稚園の朝は大切な時間である。子どもの新鮮な心持を如何に迎へるかは、大きな注意を要する問題である。

昔の幼稚園では會集といふことをした。會集そのものゝ問題は別の話として、兎に角く、それを教育開始としたものである。そこで、會集前は幼稚園のまだ始まつてゐない時間とした。會集はしないで、さあ之れからと、くぎりをつけて教育開始をする風がどこにもある。其のくぎりを鐘でするものもある。『皆さんおはいり』でするものもある。いづれにしても、其のくぎりがある以上、その前は軽く扱はれる。子どもは來てゐても、先生は居ても、まだ幼稚園は始まつてゐないことに考へられたりする。それでいゝものであらうか。

くぎりをつけることは、先生にとつては便利なことである。少くもきまりのいゝことである。殊に性分によつては、そうしなければまとまりのつかない様な氣のする人もあるであらう。しかし、それは、幼稚園を幼稚園として、まとめ考へ、教育を教育として、きまりをつけて考へるために起ることである。

つまり、一齊教育主義のためである。ひとり／＼の子どもにとつて、幼稚園の生活が何のくぎりも要し
よう。家から、道路から、幼稚園へ、ひとつ／＼の生活があるだけである。その生活がそのままつと
幼稚園の教育の中へ導かれるのでなければならぬ。遠淺に、する／＼と幼稚園へすべり込むといは
うか。爪さき上りに、いつの間にか幼稚園へ登り上るといふか。その間に、何のしきりもくぎりも
ものではない。不要なるのみか、そういうものは却つて邪魔なのである。

劃一々齊の學級教授を以てする學校では、鐘をならして、いざ之れからといふ様なことも己むを得な
いことであらう。のみならず自由なあそびの生活から、特に計畫せられた教育へ移つるには、そうした
ハッキリした意識のさかひをつけることも、時に或は必要かも知れない。しかも、幼稚園でそれを倣ふ
要はない。そんなにして、強ひて被教育意識をもたせることは、つとめて特殊意識を避ける幼兒教育の
根本原則に反するものである。

もつと自然な、人間が人間を迎へるあたりまへの態度がいくらかあらうものである。

『お早よう』

子どもが來た時、先生が支關でなり、銘々のお部屋でなり迎へて下さる。子どもにとつて、どんなに
か嬉しいことか分らない。全部の先生が皆整列して居て下さる必要はない。のみならず、それが必ずし

も御挨拶のための御挨拶ではない。淡いながらに先生への親しみを以て、いそ／＼として集つて来る子ども達の心を迎へるために、先生の笑顔ほど大事なものは無い。その貴い笑顔で、子どもの爲に其の日の幼稚園びらきをして下さるのである。自然御挨拶だけでは終らない。そこから直ぐに個人對話が始まらなければならぬ。

そこへ又他の子どもが来る。

『そう……』

『あなたも……』

『それから……』

楽しい一團の朝の會話が、それが即ち幼稚園の本體の他のものであらうか。——朝の挨拶は挨拶、教
育はいづれ後程と思つたりしてはならない。

各のテーブル（幼稚園にはテーブルはあつた、デスクはない）には、それ／＼面白／＼なもの待ちかまへて居る。一つには畫用紙とクレヨンが置いてある。一つには粘土が置いてある。一つにはボール紙と鋏と糊と、前日から造りかけのお家とが置いてある。子どもは銘々好むところに行つて仕事を始める。あそびだかお稽古だか、そんな區別が子どもにあるものではない。たゞ面白いから面白いだけの

ことである。それを、まだ教育が始まらないと誰がいへよう。——子どもが何か始めたところに、其の日の幼稚園は始まるのである。

若しそれがあそびであると言ひたいならば、其のあそびから教育へ、いつの間にか引き入れてゆく處に、幼稚園の先生の手腕がある。さあ積木を始めませうと、開き直らなければ教育が出来ないと、思ふ人は、一番幼稚園らしくない先生である。

これはお部屋の中のことに限らない。砂場でも、ブランコでも、スベリ臺でも、植込みの傍でも子どもに興味をひきつけたものから、其の日の幼稚園が始められるのである。先生は、そこに教育の機會を見出してゆくだけのことである。だけのこと、いへば容易い様であるが、教育を教育として始めるよりは大に手腕がいる。六かしいけれど、そうでなければ眞の幼稚園にはならないのである。

斯うして、ひとしきり、みつしりした朝の時間が充實せられるのである。子どもとしても、一番興味の新鮮な、自發性の充溢してゐる、神經の落ちついてゐる時間を貴重にせられる程幸などはない。それを教育のまだ始まらない前の時間として、先生は職員室に、そしてお部屋は子どもの控室に使はれてゐるのでは勿論ない。いく加減子どものあそびあいた頃になつて、さあ始まりですからお集りないさでは其の一日の幼稚園が、出發點に於て既に誤つてゐるのである。そのあとが、幼稚園として自然味を持ち

得ないのは已むを得ないことである。幼稚園を、ほんとうに子どもの生活の自然味の中に置き得るのも置き得ないのも、朝にあると言つてよい。而して、幼稚園を子どもの生活と別ものにはしないにしても幼稚園の中に子どもの生活を置くか、子どもの生活の中に幼稚園を見出すかの、極くこまやかな違ひが一つに懸つて朝にあると言ふべきである。

幼稚園の朝については、餘程こまかに研究せられる必要がある。

幼児の目測に関する研究（一部）

神戸幼稚園

本研究は、我幼稚園児について、種々の長さの直線の中心を求めしめ、其二等分判断の正確度によつて、幼児の長さに対する目測と、それに伴ふ意志活動の特徴を吟味しやうと試みたものであります。

分割する直線の長さは、一四センチ、七センチ、三、五センチ、二センチの四種であるが、第一圖に示す様な用紙に印刷したものを用ひ、是等諸線の二等分を、各第一第二、第三、第四分割の名稱を用ひました。